人間文化研究機構第27回公開講演会・シンポジウム

没後150年

シーボルトが紹介した日本文化

Philipp Franz Balthasar von Siebold

2016年1月30日|土|

会場：ヤクルトホール

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

画像提供：Brandenstein-Zeppelin Family archives, Five Continents Museum (Munich)

人間文化研究機構第27回公開講演会・シンポジウム

没後150年　シーボルトが紹介した日本文化

日　　時：2016年１月30日（土）13：00～17：30
会　　場：ヤクルトホール（東京都港区東新橋１－１－19　ヤクルト本社ビル）
主　　催：人間文化研究機構
担当機関：国立歴史民俗博物館
後　　援：文部科学省

プログラム

13：00　主催者挨拶　　立本　成文（人間文化研究機構長）
13：05　企画趣旨　　日高　　薫（国立歴史民俗博物館教授）
13：35　基調講演「シーボルト父子の日本コレクションとヨーロッパにおける日本研究」
ヨーゼフ・クライナー
（ボン大学名誉教授・法政大学国際日本学研究所客員所員）
14：35　*****　休憩　*****
14：50　講演「ジャポニズムの先駆けとなったシーボルトの植物」
大場　秀章（東京大学名誉教授）
15：35　講演「近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置」
松井　洋子（東京大学史料編纂所教授）
16：20　*****　休憩　*****
16：35　パネルディスカッション「シーボルト研究の現状とこれから」
パネリスト：ヨーゼフ・クライナー×大場　秀章×松井　洋子×日高　　薫
司　　会：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）
17：25　挨拶　　久留島　浩（国立歴史民俗博物館長）

総合司会：佐藤洋一郎（人間文化研究機構理事）

講演者の紹介

Josef KREINER（ヨーゼフ・クライナー）

ボン大学名誉教授・法政大学国際日本学研究所客員所員

・『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（編著、同成社、2011年）

・『黄昏の徳川ジャパン―シーボルト父子のみた日本―』（NHKブックス、1998年）

・『ケンペルのみた日本』（NHKブックス、1998年）

大場秀章（おおばひであき）

東京大学名誉教授

・『大場秀章著作選』Ⅰ・Ⅱ 八坂書房、2006年

・『サラダ野菜の植物史』新潮社、2004年

・『江戸の植物学』東京大学出版会、1997年

松井洋子（まついようこ）

東京大学史料編纂所教授

・「出島とかかわる人々」（松方冬子編『日蘭関係史をよみとく　上巻　つなぐ人々』臨川書店、2015年）

・『ケンペルとシーボルト―「鎖国」日本を語った異国人たち』（山川出版社、2010年）

・「ジェンダーから見る近世日本の対外関係」（『日本の対外関係６　近世的世界の成熟』吉川弘文館、2010年）

日高　薫（ひだか　かおり）

国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系・教授

・展示図録『楽器は語る―紀州藩主徳川治宝と君子の楽―』（編著、国立歴史民俗博物館、2012年）
・『異国の表象　近世輸出漆器の創造力』（ブリュッケ、2008年）
・「蒔絵の「色」―絵画と工芸のはざまで」（玉蟲敏子編『講座　日本美術５〈かざり〉と〈つくり〉の領分』、東京大学出版会、2005年）
・『日本美術のことば案内』（小学館、2002年）

大久保　純一（おおくぼ　じゅんいち）

国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系・教授

・『日本美術全集 15 浮世絵と江戸の美術』（責任編集、小学館、2014年）
・『浮世絵出版論：大量生産・消費される〈美術〉』（吉川弘文館、2013年）
・『カラー版　北斎（岩波新書）』（岩波書店、2012年）
・『カラー版　浮世絵（岩波新書）』（岩波書店、2008年）
・『広重と浮世絵風景画』（東京大学出版会、2007年）

企画趣旨

日高　薫（国立歴史民俗博物館）

19世紀に二度にわたり来日したドイツ人医師、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold）は、江戸時代の日本に近代的な医学を伝える一方で、日本の自然や生活文化に関わる膨大な資料を収集し、ヨーロッパに持ち帰った。シーボルトの日本研究が、帰国後に出版された『日本　Nippon』（1832－1882）や『日本植物誌　Flora Japonica』（1835－1870）などに結実し、後世の日本学や植物学に大きく貢献したことはよく知られるところである。

シーボルトの活動は、著書の出版にとどまらない。ライデン・アムステルダム・ヴュルツブルク・ミュンヘンの四つの都市で開催された日本展示、園芸植物の通信販売など、さまざまな手段によって、19世紀の西洋世界に「異文化としての日本」を紹介し続けた。

本シンポジウムでは、没後150年を記念して、各分野からの視点で、シーボルトの功績を振り返るとともに、今後のシーボルト研究を展望する。

国立歴史民俗博物館を中心としたシーボルトに関する調査研究

人間文化研究機構では、「日本関連在外資料の調査研究」の一環として、シーボルトに関わる調査研究事業を、国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）を中心とする研究組織によって推進してきた。「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」という長いタイトルがついたこのプロジェクトは、現在歴博の館長をつとめる久留島浩教授を研究代表者として、2010年（平成22）から６カ年計画で始められ、この３月で終了する予定である。

タイトルにあるように、本研究は、19世紀の日本で収集され、海外に渡った日本資料を対象としている。外国人たちによって持ち帰られたコレクションは、収集された時期や経緯がほぼ明確な、時代の「規準」となる貴重な歴史資料であるにもかかわらず、その存在や価値が注目されないまま収蔵庫の中に眠っている例が少なくない。これらの資料に光をあて再評価することによって、日本国内の歴史研究に役立てるのみならず、展示等への活用を促進し、海外における日本研究や日本文化紹介の活性化に貢献したいというのが本プロジェクトの趣旨である。

そこで、質・量ともにすぐれ、全体像がある程度把握されているシーボルト父子のコレクションに注目し、これまでの調査研究の成果を補うとともに、資料情報の共有化のシステムづくりのモデルケースとすることとした。

シーボルト関係資料は、彼が収集した日本の民俗資料や美術品、書籍などから、植物・動物標本など自然科学の資料、彼自身や二人の息子・弟子たちの手による文献資料、出版物の挿図の原画など多岐にわたり、また、オランダやドイツ、イギリスをはじめとする複数の所蔵者のもとに分散している。これら膨大な資料の一部は、精力的な調査研究をおこなった先学の成果として公表されているが、十分な調査が行き届いていない資料や、存在は確認されているが一般に広く紹介されていない資料も数多く残されている。シーボルトは日本では有名な人物であり、彼の日本研究における

功績やコレクションについては、これまでも多くの研究の蓄積があるにもかかわらず、シーボルト関係資料は、必ずしも利用しやすい状況とはいえないのである。

ミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルト・コレクション

プロジェクトでは、シーボルトが収集した民族学的資料を中心に、多様な「もの資料」をあつかい、さらにコレクションの成立背景を知ることのできるシーボルト父子の書簡・記録・草稿などの文献資料（シーボルトの末裔であるブランデンシュタイン＝ツェッペリン家やドイツ、ルール大学・ボーフム、ベルリン中央図書館などに所蔵）をも対象としたが、なかでも最も労力を注いでとり組んできたのが、シーボルトのコレクションとして重要な位置を占めながら、従来は詳細な調査がなされてこなかったミュンヘン民族学博物館が所蔵する二度目の来日時のコレクションの悉皆調査である。（ミュンヘン民族学博物館は、2014年からミュンヘン五大陸博物館と名称を改めている）

従来、シーボルト・コレクションといえば、一度目の来日時に収集されたオランダ・ライデン民族学博物館所蔵のコレクションがよく知られており、日本で開催される展覧会においてミュンヘンのコレクションが展示される機会は少なかった。歴博では、このほとんど未紹介ともいえるコレクションを対象に、５年間以上の歳月を費やし、10回以上におよぶ調査をおこなってきた。その結果、総点数6,000点以上の多種多様な資料群の全点画像付データベースがほぼ完成し、学術協力協定を締結しているミュンヘン五大陸博物館の許可のもと、３月末までに歴博のホームページ上で一般に広く公開される予定となっている。

さらに、歴博では、このプロジェクトの成果にもとづく企画展示を開催する準備を現在進めており、７月オープンの歴博における展示を皮切りに全国５会場を巡回する予定である。

今後の研究の展開について

６年間の調査研究活動のなかであらためて実感したのは、シーボルト関係資料の幅広さとその圧倒的な量である。歴博が推進してきたプロジェクトは、今年度をもって一つの区切りを迎えるが、今後の調査研究の継続によって更なる成果が想定されることから、来年度からの６年間も、かたちを変えて研究調査を進めていくことが決定している。次期の事業においては、ウィーン世界博物館が所蔵するシーボルトの次男、ハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold）によるコレクションの調査研究を核として、同時代の日本関連「もの資料」、シーボルト父子関係の文献調査を進めると同時に、その成果を展示・教育へ活用し、日本文化発信の国際連携モデルの構築を目指す。

現在のプロジェクトが目的としてきた調査研究情報の「共有化」については、それぞれ背景となる事情があり、その達成に向けては多くの課題も残されているが、今回のプロジェクトによる成果が、今後の所蔵者間の連携、情報の共有化への足がかりとなることを願っている。

シーボルト父子の日本コレクションとヨーロッパにおける日本研究

Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー
（ボン大学名誉教授・法政大学日本学研究所客員所員）

ヨーロッパにおける日本民族文化や社会・歴史に関する研究は、その両文化の最初の接触があった16世紀後半、室町末期までにさかのぼる。その時点から江戸時代を通じて、初めはイベリア半島のスペインやポルトガル、のちにはイギリスと、特にオランダを通じて膨大な数の日本の美術工芸品がヨーロッパに流れ、あるいは輸出され、近世ヨーロッパの生活に日本文化が深く溶け込んでしまった。その間にいくつかのコレクション化も試みられたが、それらエンゲルベルト・ケンペルEngelbert Kaempferやカール・ペーター・ツンベルクCarl Peter Thunberg、あるいはまた18世紀末ごろのイサーク・ティチングIsaac Titsinghのコレクションは散逸してほとんど残っていない。

百科全書主義の新しい学問の思想に立って、初めて体系的・総合的な日本研究を試み、またそれを可能にする日本コレクションを成功させたのは、文政6（1823）年から12（1829）年まで長崎の出島のオランダ商館で活躍したドイツ・ヴュルツブルグ生まれの医師・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトPhilipp Franz von Sieboldであった。シーボルトは目録上、5,000点以上にのぼる日本コレクションをもとにして、オランダ・ライデンで1837年に世界最古の民族学博物館を設立した。また、動植物のコレクションも、同じくオランダのライデン、ベルギーのアントワープ、その他ヨーロッパの学問の中心たる都市に残している。そして、それら多数のコレクションを活用して日本の動植物性ならびに日本の歴史・文化をまとめた大著作『日本』*Nippon*を長年にわたって発表した。この著作は、西洋におけるその後の日本研究の基礎となっていったと言っても差し支えないと思う。

その、シーボルトの業績の影響はヨーロッパのあらゆるところに認めることができる。特に注目したいのはそれらの中でも以下に挙げる二点である。すなわち一つは日本文学の翻訳・紹介であり、アウグスト・プフィッツマイアーAugust Pfizmaierが翻訳し、1847年にヴィーンで出版された柳亭種彦著『浮世形六枚屏風』*Sechs Wandschirme in Gestalten der vergänglichen Welt*である。これは、シーボルトがヨーロッパに持ち込んでヴィーンの帝室図書館に寄贈した日本の文献のうちの一冊で、プフィッツマイアーはヴィーンの学士院で長年にわたって東洋研究を続ける中、独学で日本語を身につけてこれを訳し、ヨーロッパにおいて初めて翻訳された日本の文学作品となった。これは、プフィッツマイアーがのち、1851年に出版した和独辞典をはじめ、その後の30年にわたって日本の文献・文学作品を文献学的に研究したことのきっかけともなった。また、その後、ライデンにあるシーボルトの資料をもとにしてヨハン・ヨーゼフ・ホフマンJohann Joseph Hoffmannが近代言語学の方法論を用いて初の日本文法の研究書を出版している。これらは現代まで続く日本文学に対するヨーロッパ・西洋人の多大なる興味関心の嚆矢であった。

もう一つ取り上げたいのは、同じくシーボルトがヴィーンに寄贈したアイヌ資料の中で、アイヌ語辞書である上原熊次郎『蝦夷方言藻汐草』をプフィッツマイアーが紹介・研究したことである。これが、日本文化の中におけるアイヌ民族文化の役割研究の出発点となった。

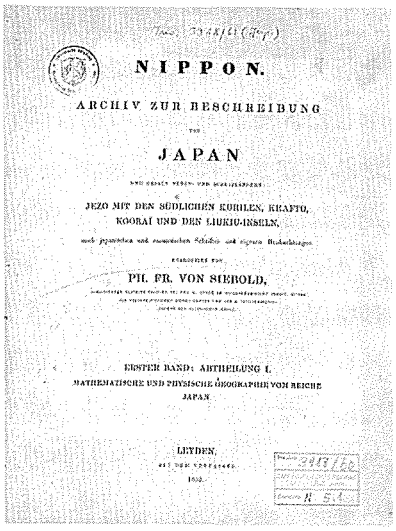
シーボルトは安政５（1859）年から８（1862）年の二回目の日本滞在中にも、やはり大きなコレクションを収集し、そこに最初の滞在中に手に入れたいくつかのものも合わせて、1866年にミュンヘンで展示した。それらは彼の没後に、残された妻によって、息子二人の形見を除いてバイエルン王国に渡されており、現在、ミュンヘンにある五大陸（民族学）博物館の始まりとなっている。

シーボルトによって安政５（1859）年に日本に連れて来られた長男のアレクサンダー・フォン・シーボルトAlexander von Sieboldは、明治維新の後、日本政府の外務省に長年、お雇い外国人として勤め、日本とヨーロッパにまたがって活躍し日本の外交に大いに貢献した。アレクサンダーは日本の上流社会との接触が多かったこともあって、近世日本の武士社会の生活文化に深い興味を持って、それに関係するコレクションを収集した。それはのちにヴュルツブルグ市に寄贈されたが、残念ながら第二次世界大戦でほとんど失われてしまった。

次男のハインリッヒ（ヘンリー）・フォン・シーボルトHeinrich (Henry) von Sieboldは明治２（1869）年に来日し、明治29（1896）年まで外交官としてオーストリア・ハンガリー帝国総領事館で活躍した。ヘンリーは父の日本研究を補てんする心持ちで、第一には、父・大シーボルトがあまり収集研究できなかった日本の先史時代の遺跡を、日本の研究家、例えば蜷川式胤と手を組んで、共に幅広く表面収集ないし発掘調査を行い、日本の先史文化を解明しようと試みた。明治10（1877）年秋、ヘンリーが東京都の大森貝塚の発掘に着手したのと同時にエドワード・シルベスター・モースEdward Sylvester Morseも専門的な立場から同貝塚の発掘に取り掛かった。二人の間の論争は日本民族学、先史学の出発点だと言ってもよい。むしろ、ヘンリーの方の見方には幅があって、後の研究の流れに沿っているのだが、残念ながら東京帝国大学の地位にあったモースほど知られてはおらず、むしろ忘れ去られてしまっている。その後のヘンリーの日本民俗文化のコレクションは1889年にヴィーンに寄贈され、現在、ヴィーンの世界博物館（民族学博物館）の基礎となる重要なコレクションとなっている。また、ヴィーン工芸美術館で保管されている日本美術工芸コレクションに含まれる日本仏教美術のコレクションは、最近注目される、いわゆるジャポニズム時代におけるヨーロッパの日本仏教美術の発見という側面から大きな意義を持っている。

シーボルト父子の日本研究と日本コレクションは結局、西洋における文献学的日本研究（日本学）の基礎となっただけでなく、民族学的な比較の立場からの日本文化研究の始まりでもあって、最近注目されるいわゆるヴィジュアル・ターンの重要な役割を果たしていると言えよう。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの肖像
大蔵省お雇い外国人Eduardo Chiossoneキオッソネの石板



NIPPON.

ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG

JAPAN

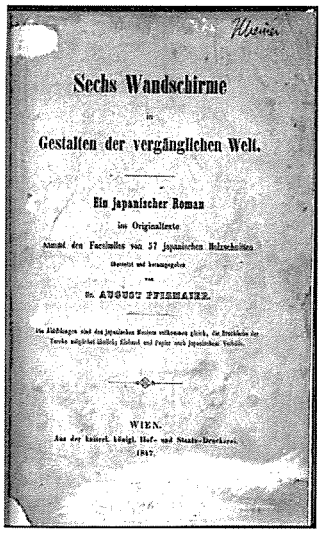
JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, KRAFTO, KOORAI UND DEN LIUKIU-INSELN.

PH. FR. VON SIEBOLD,

ERSTER BAND: ABTHEILUNG I.
MATHEMATISCHE UND PHYSISCHE GEOGRAPHIE VOM REICHE JAPAN.

LEYDEN,

『NIPPON』の表紙



Sechs Wandschirme
in
Gestalten der vergänglichen Welt.

Ein japanischer Roman
im Originaltexte
Nebst den Facsimiles von 37 japanischen Holzschnitten
Übersetzt und herausgegeben
von
Dr. AUGUST PFIZMAIER.

WIEN.
Aus der kaiserl. königl. Hof- und Staats-Druckerei.
1847.

Pfizmaierの浮世方六枚屏風　独訳の表紙
日本語版及びドイツ語翻訳も1847年にヴィーンの
大蔵省印刷局で出版された。

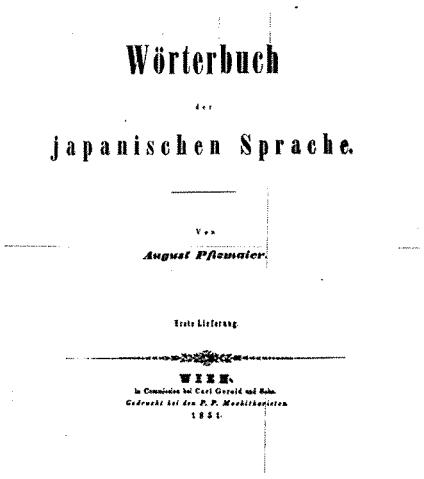
歌川豊國・柳亭種彦の和文テキスト

WŒRTERBUCH
der
japanischen Sprache.

Von
August Pfizmaier.

Erste Lieferung

Pfizmaier の Woerterbuch



Wörterbuch
der
japanischen Sprache.

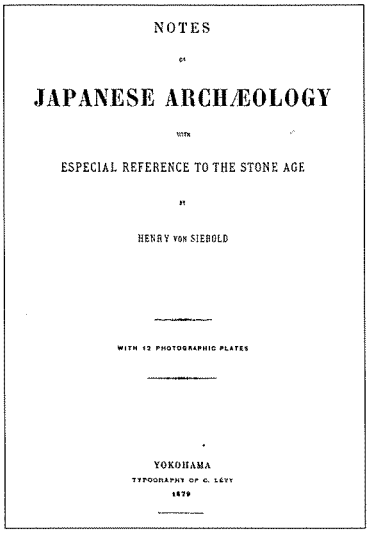
Von
August Pfizmaier.

Erste Lieferung.

WIEN.
In Commission bei Carl Gerold und Sohn.
Gedruckt bei den P. P. Mechitharisten.
1851.

Pfizmaier の Woerterbuch

シーボルトの二人の息子（アレクサンダー・フォン・シーボルトとハインリッヒ（ヘンリー）・フォン・シーボルト）の肖像写真



NOTES

OF

JAPANESE ARCHÆOLOGY

WITH

ESPECIAL REFERENCE TO THE STONE AGE

BY

HENRY VON SIEBOLD

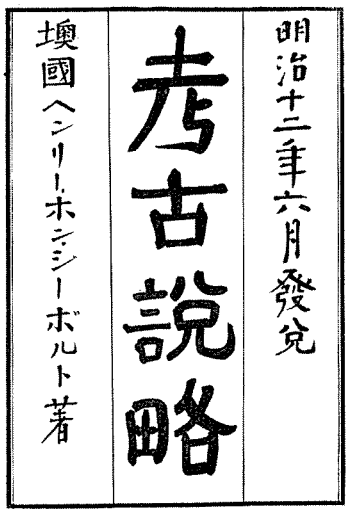
WITH 12 PHOTOGRAPHIC PLATES

YOKOHAMA

TYPOGRAPHY OF C. LÉVY

1879

ヘンリー・フォン・シーボルトの『Japanese Archaeology』の表紙

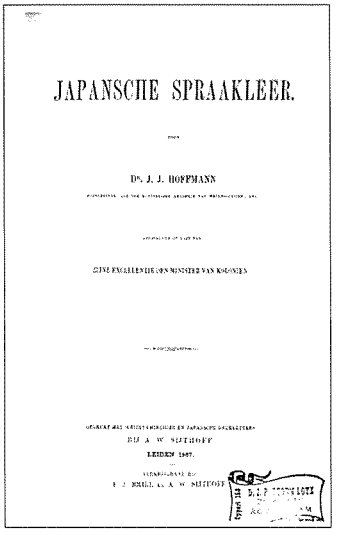


明治十二年六月發兌

考古説略

墺國ヘンリー・ホン・シーボルト著

ヘンリー・フォン・シーボルトの『考古説略』の表紙



JAPANSCHE SPRAAKLEER.

Dr. J. J. HOFFMANN

LEIDEN 1867.

『Japansche Spraakleer』の表紙

ジャポニズムの先駆けとなったシーボルトの植物

大場　秀章（東京大学名誉教授、同総合研究博物館特招研究員）

16世紀以降のヨーロッパにおける観賞用園芸植物の栽培

日本の文物への関心は、植物についても発生した。貴顕や裕福な人びとの間に園芸趣味が台頭し、ヨーロッパには自生しない植物を生きた状態で所有することが競われた。

植物の栽培はどこで栽培するかで大きく二分される。ひとつは城や屋敷など、壁によって囲われた空間である中庭での植物栽培であり、これを園芸（horticulture）という。他は城外など解放空間での作物栽培で、農業（agriculture）と呼ばれる。園芸植物の主役を歴史的にみると、当初の薬草から、ハーブ、スパイス、サラダ用野菜を経て、観賞用植物に至る変遷がみられる。観賞用の園芸植物の栽培が盛んになるのは16世紀以降のことといってよい。

所有欲を充たすにたる植物としてまず人気を集めたのは熱帯や乾燥地帯に育つ奇妙なかたちをした多肉植物やヤシやソテツなどであった。当初愛玩されたそうした植物の人気は、ヨーロッパ産のどの植物ともまったく姿かたちを異にする異質性によるものであった。

経済的なゆとりが広い範囲に広がりゆくなかで、園芸を愛好する人びとの層も拡大し、このことにともない嗜好の多様化も広がった。上記の乾燥地帯の植物に顕著だった奇妙奇天烈とはほど遠い、ヨーロッパにも類似種があり、彼らの庭で栽培されるヨーロッパ産の自生種から改良された植物と一緒に植えても違和感の少ない植物を求める人びとも生まれた。幾何学式以外の庭園様式も生まれ、後に林地園芸へと発展する樹下に植栽できるような耐陰性植物にも関心が広がっていった。

また、熱帯などの植物は、大半の多肉植物のように、冬の寒さに耐えられず、通年を通しての戸外での栽培はできず、オランジェリーのような特別な部屋や建物を必要とした。これにたいして耐陰性のある温帯の多くの植物は一年を通して戸外でも栽培が可能であった。とくに日本は、南西諸島など一部を除けば、大半が温帯地域に属し、その植物の多くはヨーロッパの戸外でも栽培できる可能性を秘めていた。

日本の植物に高い観賞価値を見出したシーボルト・コレクション

来日したシーボルトは、日本が豊かな自然に恵まれ、その植物は温帯地域としてはヨーロッパとは較べものにならない高い多様性をもつことを喝破した。それだけではなく、日本の寺社や農家、裕福な商家の庭を目の当たりし、日本の庭園が多様な自生植物を庭園に取り入れ、自然そのもののポータルサイトとしての役割さえ果たす、多様性の高い庭園植物相を具えていることを実感した。貧弱な自生植物相には観賞価値の高い植物種も少なく、それらの植物を主として植栽したヨーロッパの庭園はまさにこの例であり、貧弱な庭園植物相しか持ちえなかった。ヨーロッパの自生植物相が貧弱であることの主な理由は最終氷期における大量絶滅によるものである。

シーボルトは来日後しばらくしてから、日本の植物でヨーロッパの庭を変えたいと考え、これを実行に移した。滞日中の1827年に脱稿した*Synopsis Plantarum Oeconomicarum*（有用植物概要）には薬草を含む、主として衣食住に役立つ447種類の植物が収載されるが、果樹（同書では食用として取

り扱われている）を除く、観賞用の園芸植物は殆ど収載されていない。しがって、シーボルトがヨーロッパの庭の変革のために日本で観賞に向く植物の探索を具体的に開始するのは、1827年以降のことであると推測される。

観賞に供される日本植物移出

日本は四周を海で囲まれる。海をわたらない限り移出は考えにくい。1498年にポルトガル人バスコ・ダ・ガマが船でアフリカ最南端の喜望峰を経由してインド洋に出ることに成功した。これにより、西ヨーロッパと東アジアを結ぶ交易路が完成する。種子からの繁殖が困難な日本の植物がヨーロッパに本格的に移出されるのはこれ以降のことだとみてよい。

ポルトガルは1511年にマレー半島のマラッカを占領し、1516年には中国の広州付近に到着している。続いて1551年に広州に接してマカオを手中にした。イギリス続いてオランダも東インド会社を設立し、アジア産品の輸出を開始した。

日本を含む東アジア産植物がいつからヨーロッパに移出され始めたのか、正確な記録は乏しく、未だ推定に頼らざるをえない部分が大勢を占める。1615年前にChristiana De Trigaultは、マッテイ・リッチに中国でカキ、オレンジ、綿などが栽培されることを書き送っている。1612年に生まれたミシェル・ボイムは1643年にキリスト教の布教を目的に中国に渡ったが、ココヤシ、バナナ、竜眼、ローズ・アップル、マンゴー、パパイヤ、ビワ、グアヴァ、パラミツ、カキ、釈迦頭、ドリアン、胡椒、シナモン、ジンジャーなどの果樹が栽培されることを伝えた。

日本の植物の移出年代については、植物を正しく同定したうえでのクロノロジー研究はほとんど進んでいない。日本からのごく初期の植物移出で可能性が高いのは、マカオを経由してのヨーロッパ移出である。ポルトガル人が中心的だったイエスズ会宣教師による持ち出し、中国人商人などによる日本からマカオへの移出と、マカオからヨーロッパへの搬送が考えられる。しかし、いずれの場合も移出された植物が何種であったのか、いつであったのか特定は容易ではない。これからの大きな研究課題であろう。比較的証拠があるツバキを例として紹介する。

ほとんど自生地が日本と台湾に限られるツバキは、エイトン（W. T. Aiton）のIndex Kewensis第２版によると、1739年以前から男爵ロバート・ジェームス・ペトレにより栽培されていたという。もっともツバキに関しては、ポルトガル北部のカンポ・ペッロにあるその古木は1550年頃植えられたと唱える人もいる。最初の日本植物誌Flora Japonicaを著したツュンベルク（Carl Peter Thunberg）は帰国に際し、特色ある日本植物の苗木を持ち帰った。大半が船の難破で失われたといわれるているが、ツバキは無事で訪英中に当時のイギリスの科学界の大物、バンクス卿（Joseph Banks）に贈られた。そのうちのひとつが、バンクスによりドレスデンのピルニッツ宮殿に分与され、現在も生き残っている。

1636年のポルトガル人追放後、日本との貿易をヨーロッパで唯一独占したオランダは江戸時代末に到るまで日本との貿易を継承する。

来日した医師のなかにはアンドレアス・クライアーや助手のマイスター、ケンペル、ツュンベルク、シーボルトなど、植物に関心を抱いた人がいた。シーボルトはジャワ島での茶の栽培のために1826年にチャの種子を同島に向けて送っている。ジャワ島での茶栽培の創始者と呼ばれている。

また、日本の庭園への関心が最初にイギリスで始まり、その後ヨーロッパ各地に広まった。その

ため日本式庭園は発祥地の名を冠してイングリッシュ・ガーデンと呼ばれた。日本式庭園の人気にともない、日本の植物への関心も増していった。オランダの東インド政庁でもこれに対応した動きをしている。1828年に戦艦De Kortenaarは7月1日にオランダのテセル到着したが、日本の植物を収納した4ケースを積んでいた。荷主はオランダに住む花卸商で、ライデン大学のラインワルト教授が支援した。積荷の137の植物のうち80が生きた状態で到着した。

シーボルトによる日本植物の移出のクロノロジー作成

その時、日本にシーボルトが滞在していることは知られていた。バタヴィアにいた植物学者Zippeliusは東インド政庁による日本植物の移出にシーボルトが協力するよう要請していた。シーボルトによる日本植物の移出は、当初個人的なものであった可能性は否定できないが、実施の段階では東インド政庁が重要な役割をはたしている。

最初にジャワに移送されたシーボルトの最初の植物は、1826年の江戸への参府旅行の際に収集されたものと1826～28年に出島で栽培されていたもので、1829年にヴィルヌーヴが送ったものである。500種類以上あり、1829年6月にアムステルダムに着き、7月8日にライデンの植物園に到着した。生き残ったのは157種類だったが、うち57種類はすでに枯れてしまっていた。

シーボルト自身による日本植物の積み出しは同じ1829年に、Louisa Princes der Nederlanden号への搭載であったが、送られた332種類のうち生き残ったのはわずか38種類だった。船は同年10月28日にオランダのDordrechtに入り、そこからライデンの植物園へと運ばれている。

1830年1月23日にシーボルトは日本からジャワに戻り、オランダに移送すべく2,500種類12,800株の日本植物を携行した。それらのうち、500種類800株は良好な状態で到着した。同年7月8日に船はAntwerpに到着した。生き残ったのはわずか260種類の生品と球根で、シーボルトはそれをヘントの植物園の園芸主任Jean Henri Musscheに託した。現在のベルギーのオランダからの独立戦争が勃発し、それらの植物をライデンに移送できなかったためである。

シーボルトが日本から送り出した植物数や船便名、日付などはオランダ、ハーグの国立公文書館で調べだすことはできる。しかし、日本から移出された植物が何種であるかは、文書だけの調査では明らかにしえない。シーボルトが来日中に採集し、標本としてオランダのライデンやミュンヘンに保管される標本と照合することで、その実体を明らかにしえる可能性はある。精度の高い移出クロノロジーの作成はまだほとんど手付かずの状況だといえる。

驚嘆をもって迎えられた日本の植物

シーボルトの植物コレクションは、ヨーロッパ到着後も数多の受難に直面したが、王侯貴族や裕福層の間に愛好者を増やしていった。日本を含むアジアや新大陸の園芸植物の導入を促進する目的で1842年にオランダに王立園芸振興協会が設立され、1845年には日本産などの種子・苗木の繁殖と頒布を目的にした商会が生まれ、大量の種子・苗木がヨーロッパ各地に販売された。日本文化と産品紹介に与ったParis（1862年）とWien（1873年）の万博に先立ち、日本の独自性の高い植物は、あたかもその後のジャポニズムの波紋を生む一石のごとくであった。

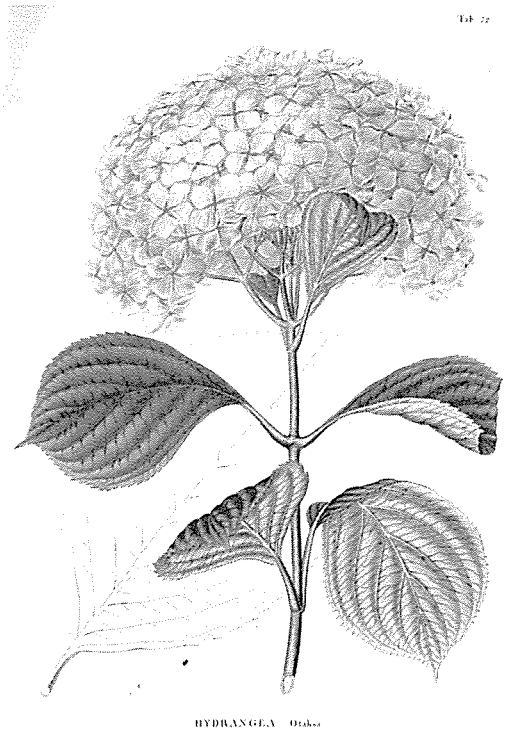


写真１　アジサイ　Flora Japonica、52図版

写真２　ヤブツバキ　東京都内にて植栽

写真３　ヤマブキ　川原慶賀画

写真４　ヤマユリ　山形県内での自生株

近世日本を語った異国人たち：シーボルトの位置

松井　洋子（東京大学史料編纂所）

はじめに

1　近世日本の対外関係とオランダ

a．対外関係の枠組み

いわゆる「鎖国」：厳しいキリスト教の禁止、出入国管理、貿易掌握　→四つの口での関係

b．日蘭関係

＊出島の住人

・オランダ東インド会社（→東インド政庁）の職員　（広義の「オランダ人」）　10人前後

　商館長（上級商務員）・下級商務員・商務助手、医師＋若干の職人、船員や水夫、兵士、下僕

＊主たる業務：貿易　→許可条件としての情報提供「風説書」　→御礼と献上「江戸参府」

＊関わる日本人たち

　管理：奉行所役人　長崎地役人（＝町人身分の役人　出島乙名　阿蘭陀通詞　長崎会所など）

　商品・日用品・労働の供給：諸色売込人・内通詞　日雇　荷漕船船頭　水主　働之者　遊女

c．貿易のしくみの変遷

＊相対商売（1641－1671）→市法商法（1672－1684）→定高制の開始（1685－）→正徳新例（1715－）

＊その後の貿易　日本側の区分　　本方と脇荷

　　オランダ側の区分　　会社（政庁）と個人

＊主要貿易商品　17世紀：生糸・絹織物⇔金・銀・銅　→18－19世紀：綿織物・砂糖・薬種⇔銅

⇒日本を伝える／日本に伝える　そのあり方を規定する要素

2　ヨーロッパ人の伝えた日本

a．16－17世紀の日本情報

①イエズス会をはじめとする宣教師たちの報告

②オランダ人のアジアへの関心：ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン『東方案内記』（1596）

③オランダ東インド会社の収集情報：イザーク・コンメリン『東インド会社の起源と進歩』（1645）

④著述家による統合的叙述：アルノルドス・モンターヌス『東インド会社日本遣使録』（1669）

⑤植物への関心

b．「日本学」の先駆者：エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kämpfer（1651－1716）

・はるかな旅：ドイツ北部レムゴーLemgo生まれ　16歳から旅をして学ぶ

　1683年ドイツを離れる　1690年長崎商館医師（1690.9－1692.10）　1694年帰郷

・日本についての記述

『廻国奇観』(1712)　→日本についての著作の予告

『日本誌』(1727英語版)(1777－1779ドイツ語版)

・協力者：今村源右衛門(1671－1736)　内通詞小頭の息子　ケンペルに奉公　→通詞としての昇進

c．医師・植物学者カール・ペーター・ツュンベリーCarl Peter Thunberg (1743－1828)

・スウェーデン生まれ　→ウプサラ大学でリンネCarl von Linneに学び1770年医学博士

1771年末にオランダ発　→長崎商館医師(1775.8－1776.12)　1779帰郷

・『一七七〇年から一七七九年に至るヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記』(1788－1793)

『日本植物誌』(1784)

・協力者(ウプサラ大学に残る日本人書翰)　通詞たち、中川淳庵(若狭藩医)、桂川甫周(奥医師)

d．商館長イザーク・ティツィングIsaac Titsingh (1745－1812)

・アムステルダム生まれ　1765年　オランダ東インド会社の下級商務員としてアジアへ

1779.11－1780.11／1781.11－1783.106／1784.8－1784.11日本商館長　1801ヨーロッパに戻る

・日本に関する著作(英・蘭・仏語出版を目指す)『日本における結婚と葬儀の式典』『歴代将軍譜』

・協力者(離日後の文通)　通詞たち、桂川甫周・中川淳庵、朽木昌綱(福知山藩主)

⇒「蘭学」と「日本学」　相互作用として

3　シーボルトの時代

a．東インドとヨーロッパの状況

＊太平洋航路とアジア：毛皮交易　イギリス　ロシア　アメリカ

＊オランダ東インド会社の衰退と解散

17世紀後半：インドネシア諸国の内紛に介入しつつ、貿易利権増大、領土拡大へ関心移行、英仏との競争、領土維持費用の激増、職員の私貿易や不正

18世紀：３次にわたるジャワ継承戦争、需要の動向変化　→1799年会社解散

＊本国の衰退：蘭英戦争、産業・貿易の衰退、国家財政の破綻　フランス革命　→共和国消滅

b．出島の危機

＊貿易の縮減と派船の困難

貿易の縮減：1790年半減商売

船の欠航(中立国傭船・船便途絶・私貿易船の来航)

＊商館の火災と商館長の客死(1798)

＊ヘンドリック・ドゥーフHendrik Doeff Jr. (1777－1835)　1803－1817日本商館長

・相次ぐ異国船：ロシア船ナデジュダ号でレザノフ来航(1804)・イギリス船フェートン号来航(1808)

・1813／14年イギリスの出島接収計画(ジャワ代理総督ラッフルズSir. Thomas Stamford Raffles)

c．新生オランダ王国の植民地統治政策

＊植民地・交易地に関する情報収集、日本貿易をめぐる試み

・王立骨董（珍品）陳列室 Het Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden

＊ヤン・コック・ブロムホフ Jan Cock Blomhoff（1779－1853）　1817－1823日本商館長

＊ヨハン・フレデリック・ファン・オーフェルメール・フィッセル　1820－1829日本勤務　荷倉役
　Johan Frederik van Overmeer Fisscher（1800－1848）

4　シーボルトの来日と活動

＊フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト Philipp Franz von Siebold（1796－1866）

・ドイツのヴュルツブルク生まれ　医学・解剖学・薬学・化学・植物学・物理学・人類学等を学ぶ

a．一度目の滞在（1823.8－1829.12）：オランダ領東インド陸軍外科軍医少佐　出島商館付医官

・医官　長崎市中と鳴滝で診療、医学の実地教育　多くの門人

・日本に関する調査と収集：博物学（植物・動物・鉱物など）→全般的学術調査

・協力：商館長ブロムホフ、商館長ステュルレル、ビュルゲル、フィレネウフェ、川原慶賀

・江戸参府（1826）：江戸滞在延長計画　ステュルレルとの不和　多くの出会い　コレクション

　★蒐集の旅としての江戸参府

　★貿易構造、個人貿易とコレクション

・シーボルト事件　国禁（国外追放）　多くの日本人の処罰

b．ヨーロッパへの帰還

・『日本植物誌』と『日本動物誌』：ドイツ・オランダの研究者との協力による出版

・『日本』副題：「日本とその隣国、保護国―蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島―の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。」

　協力者：ホフマン　郭成章　　材料：門人の論文　書籍とその翻訳　地図　調査収集品

・日本の専門家：対日外交への助言・日本開国をめぐる意見

c．二度目の滞在（1859.8－1862.5）：オランダ貿易会社顧問　江戸幕府顧問

・政治的外交的役割を希求⇔オランダ政府の思惑　失意の帰国

・『日本』完成をめざす　→関係資料を残しての帰国

・日本に関する新たな蒐集

おわりに：シーボルトの遺したものとこれからの課題

子供たち：楠本イネ（1827－1903）：遊女其扇（本名たき）との娘。産科の女医。

　長男アレクサンダー Alexander von Siebold（1846－1911）

　次男ハインリヒ Heinrich von Siebold（1852－1908）

蒐集品・文書

略年表

1600（慶長５）	リーフデ号豊後に漂着　関ヶ原の戦い
1609（慶長14）	平戸オランダ商館開設
1641（寛永18）	オランダ商館平戸から長崎の出島に移転
1690（元禄３）	商館医師ケンペル長崎に到着、1692年まで滞在
1715（正徳５）	正徳新例が出される
1716（享保元）	ケンペル、故郷のレムゴーで死去
1727（享保12）	ケンペル『日本誌』（英語版：ショヒツァー編）出版
1774（安永３）	『解体新書』が出版される
1775（安永４）	商館医師ツュンベリー長崎に到着、翌年まで滞在
1779（安永８）	商館長ティツィング長崎に到着、翌年まで滞在（1781～83、1784にも来日）
1787（天明７）	松平定信、老中となる
1789（寛政元）	フランス革命始まる
1790（寛政２）	貿易半減令、江戸参府４年に１回となる
1795（寛政７）	フランス革命軍、オランダを占領
1796（寛政８）	シーボルト、ドイツのヴュルツブルグで誕生
1799（寛政11）	オランダ東インド会社解散
1804（文化元）	ロシア使節レザノフ長崎に来航
1814（文化11）	オランダ王国独立を回復
1823（文政６）	バタフィアへ到着、日本商館の医官に任命され、８月11日長崎に到着
1825（文政８）	幕府異国船打ち払いを命じる
1826（文政９）	２月江戸参府に出発、７月帰着
1827（文政10）	其扇（楠本滝）、シーボルトの娘イネを出産
1829（文政12）	国外追放の判決を受け、12月30日長崎を離れる
1830（天保元）	１月バタフィアへ到着、７月オランダに到着
1832（天保３）	『日本』第一分冊出版
1833（天保４）	『日本動物誌』第一分冊出版
1835（天保６）	『日本植物誌』第一分冊出版
1844（弘化元）	オランダ国王将軍に親書を送る
1845（弘化２）	ヘレナ・ガーゲルンと結婚
1846（弘化３）	長男アレクサンダー生まれる
1847（弘化４）	ライン河畔ボッパルトに移住　プロイセン国籍を取る
1848（嘉永元）	長女ヘレーネ生まれる
1850（嘉永３）	次女マティルデ生まれる
1852（嘉永５）	次男ハインリヒ生まれる
1853（嘉永６）	ボンに転居　ペリー浦賀に、プチャーチン長崎に来航
1854（安政元）	三男マキシミリアン生まれる　日米和親条約締結
1858（安政５）	日蘭修好通商条約締結
1859（安政６）	８月長崎に到着
1861（文久元）	４月長崎を発ち横浜到着　６月江戸へ　10月江戸退去の申し渡しを受ける
1862（文久２）	１月長崎に到着　11月オランダ帰着
1866（慶応２）	10月ミュンヘンで死去

参考文献

今井正編訳（ケンペル著）『日本誌　日本の歴史と紀行』（霞ヶ関出版　改訂増補新版　2001）
フレデリック・クレインス『十七世紀のオランダ人が見た日本』（臨川書店　2010）
牧健二『西洋人の見た日本』（清水弘文堂書房　1968　初版　1949）
高橋文訳（ツュンベリー著）『江戸参府随行記』（東洋文庫583　平凡社　1994）
沼田次郎訳『ティチング日本風俗図誌』（新異国叢書７　雄松堂書店　1970）
沼田次郎『洋学』（吉川弘文館　1989）
横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本　ティツィング往復書翰集』（吉川弘文館　2005）
横山伊徳『開国前夜の世界』（日本近世の歴史５　吉川弘文館　2013）
新版世界各国史（13『ドイツ史』（2001）14『スイス・ベネルクス史』（山川出版社　1998）
石山禎一編著『シーボルトの日本研究』（吉川弘文館　1997）
石山禎一・沓澤宣賢・宮坂正英・向井晃編『新・シーボルト研究』Ⅰ自然科学編　Ⅱ社会・文化・芸術編（八坂書房　2003）
石山禎一・牧幸一訳『シーボルト日記　再来日時の幕末見聞記』（八坂書房　2005）
板沢武雄『シーボルト』（吉川弘文館　1960）
岩生成一他『シーボルト「日本」の研究と解説』（講談社　1977）
岩生成一監修『シーボルト「日本」』本文六巻図録三巻（雄松堂　1977-79）
大森實編『PH. FR. VON シーボルトと日本の近代化』（法政大学　1992）
季刊『日本思想史』第55号　特集シーボルト　（1999）
ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン―シーボルト父子の見た日本』（NHKブックス　1998）
栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』（東洋文庫784　平凡社　2009）
呉秀三『シーボルト先生　其生涯及功業』（吐鳳堂1896／名著出版会　1979／東洋文庫103,115,117　平凡社　1967-8）
ハンス・ケルナー著　竹内精一訳『シーボルト父子伝』（創造社　1974）
斉藤信訳（シーボルト著）『江戸参府紀行』（東洋文庫87　平凡社　1967）
斎藤信訳（A・ジーボルト）ジーボルト最後の日本旅行（東洋文庫398　平凡社　1981）
永積洋子「通商の国から通信の国へ」（『日本歴史』458号　1986）
法政大学フォン・シーボルト研究会編『シーボルト研究』1-7（1982-1990）
宮崎道生編　『シーボルトと鎖国・開国日本』（思文閣　1997）
保田孝一編著；高橋輝和，倉地克直，木之下忠敬共訳『文久元年の対露外交とシーボルト』（岡山大学吉備洋学資料研究会　1995）
箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国・近代化』（続群書類従完成会　1997）
マック・リー ン「シーボルトと日本の開国一八四三－一八六六」（横山伊徳編『幕末維新と外交』幕末維新論集７　吉川弘文館　2001）